

罪々々 刺々々

○端なくわが眼前口頭は、法の問ふ所となりぬ。正面と反面と、事の描寫と理の表白と、わが文に於て殊に甚しく混讀せられ、誤解せらる。われや黄口の一書生、字を知ること少きの罪かと、將多きの罪か。全く知ることなからましかばと、今に及びて悔いるも詮無し。われら不文の徒、須く戒心を要す。

○道徳を言ふ者、道徳の假面を被る者、近時著しく増加したり。未然に言ふに非ず、既に言ふ也。言ふ者奚ぞ恃むに足らん、被る者稍恃むべし。一國文化の増進は、この假面あるがためなること、夙に歴史のわれらに諭示する所也。

○何人も異議なき道徳の見解は、自身之を守るを必せず、他人之を守るを必ずといふことに歸着すべし。

○偶々道徳を論ずるの故を以て、これが窮行を迫るは、箱根以東に化物あらしめんとする者也。思つたり、したりは出来ませぬとは、特に論者がために設けられたる好句ならんかし。

○喰はざれば佳人と雖も、桃花の晴に笑ひ、李

花の雨に泣くの媚を競はんこと難し。こゝに喰ふといふは、大口あく事也。懸棟飛閣の人の目を眩するものありとも、或時は人の鼻を掩はしむべき下掃除の、門庭に出入するを禁じ得ざるものなることを忘る可からず。

○時弊を搔ふと稱へて、人の視事内行を許くに力むる者あり、是亦一の時弊にあらざる乎。策を失したる矯風は、矯風にあらず、挑發のみ、勸誘のみ、助長のみ。悪を懲らすといふもの、まことは悪を勵ますものなり。

○今の時、所謂ヒューマニチイを説くといはず、好くといふべし。それら諸君子の前に、敢て一笑話を獻げんか。橋語の巡查は、諸君子のために有力なる同論者也。切に行人に誨へて、左へ〜といふ、是れ豈人道を主張する者にあらずや。

○偏に法律を以て防護の具となす者は、攻伐の具となす者也。楯の両面を知悉せる後にありて、人多くは高利貸となり、詐欺師となり、賭博師となり、現時の政治家となる。

○誠信智あり、信玄膽あり、是古の戦なり。星移り、物變りぬ。すばしツこきをのみ智謀といひ、ぶら〜しきをのみ膽略といふ。拘摸と追剣とは、最もよく通俗的に、この二つの表現せられたる者也。

○罪の輕き者は監獄に行き、重き者は酒樓に行く。かしこには鐵の鎖あり、咎あり。こゝには金の縛あり、女あり。

○夜は休息のために附與せられ、計畫のために使用せらる。總ての方面に涉りて、夜は見せ掛けの時間也。人の意の天の意に乖くや久し、戻るや久し。

○もろ〜の物價の盡く騰貴せる際にも、猶以然としてあげず、あがらざるものは夫れお賽銭乎。

○あゝ作家諸君、諸君は原稿料引上げの行はれざるを恨み給ふな。其時は神、若くは佛になり得たりと思ひたまへ。たゞの神佛に比すれば、諸君は口の働くだけでも多能也。

○老熟は或意味に於て意氣の銷沈なれども、意氣の銷沈は必ずしも老熟にあらず。新進作家に代りて白す。

○絶えず作を出さざれば、作家にあらずといふ乎。作家は何の日を以てか、得て修養せん。今

の批評家の言ふ所は、今の作家をしてお目留まりますれば、直ちに次なる藝に取掛の輕技師たらしめ、手品師たらしめんとするもの也。何等の曲折をもとめず、絶えず語るを以て壯なりとせば、希はくは去つて九段公園の噴水器に觀よ。

○今の作家は、今の批評家のために毫も開發せられたることなし。されども今の批評家は、今の作家のために常に生活するなり。

○身、貧にありて志を改へざるは易き事也、多き事也。富にありては難き事也、罕なる事也、人の節操を貧にのみ見て、富に見ざるは早計也、速斷也、鼻元思案也。

○貧の墮落は要求なり、充たさんと欲して充たさるゝことなきなり。富の墮落は強請なり、飽かんと欲して飽くことなきなり。憐むべし貧の墮落は、一人の墮落なれども、憐むべし富の墮落は、一國の墮落なり。されど共に心の自然たるや、言ふを俟たず。

○智は有形也、徳は無形也。形を以て示すを得、故に智は進むなり。形を以て示すを得ず、故に徳は進むことなし、永久進むことなし。若有之

りとせば、それは智の色の餘れるをもて、徳の色の足らざるを一時、糊塗するに過ぎず。○富をなすの道は智に在りて、徳に在らず。貧人と長く語らんは、富人の損害なること疑無し。闇夜の溝に陥れる者を救はんと欲せば、自己も手を泥に汚さざる能はず。

○人の心の最きよらかなるは、人の心の最おろかなるなり。魚の多数は澄江に釣らず、濁流に釣るなり。

○稼がざる可からず、こは世に必要な事なれば、人皆知れり。何故に稼がざる可からざるか、こは更に世に必要な事なれども、知る者鮮し。

○納豆屋の聲に明け、豆腐屋の聲に暮るゝは、塵深き都の光景也。太く、短きを便とするものあり。細く長きを便とするものあり。品さま／＼

なるとともに、聲亦さま／＼なり。われは茲に世間一切を、姑く賣品といはん。利は日の中の聲の大なるものに薄く、夜の間の聲の小なるものに厚し。即ち賣聲の相違は、營業の相違也、反比例的に利得の相違也。

○號外賣の聲と、辻占賣の聲とは、新舊思想の比較の上に、最も顯著なる例證をわれらに與ふるものなり。何ぞ殊更に嗜好といはんや、趣味といはんや、將又品性といはんや。

○涙は誠意なりとぞ、猿はよく啼く者也。血は熱心なりとぞ、蚊はよく吸ふ者也。

○汝は大なり、馬なりと言はゞ、人必ず憤怒すべし。されど場合によりては、身自ら大馬に比して怪まず。辭は外に遜るなりといへど、意は内に飾るなり。利害の關係は、飾るに畜類を以てするも、猶安んじ得べきものと見えたり。

○口を極めて相罵るの時に、畜類よりは下すことなし。人の身近く置かるゝがゆゑに、犬、猫、牛、馬の常に標準とせらるゝこと、迷惑の至りなるべし。若彼等をして言語の通するを得せしめば、其第一に訴ふる所は、人の身に關する事件なるや必せり。

○鳥は高く天上に藏れ、魚は深く水中に潛む。鳥の聲聴くべく、魚の肉喰ふべし。これを取除けたるは人の依怙也。

○何様なるを世間とは謂ふと問はゞ、われは立どころに下の如き答辯をなすことを得べし。曰く、善人祭え、悪人亡ぶるの場處なりと。

○一に就かんよりは十に就け、是極めて當世の事也。諸人の感服することに感服し、諸人の感服するものに感服し、諸人の感服するときに感服せば、期せずして幸福は頭に到來せん。斷りたくも斷れざるべし。

○按ずるに社會の智識は、賣れぬ本といふものに由りて開拓せらるゝならん歟。賣れぬ本といふは、すぐれて良きか、良からぬかの二つに出でず。この二つは先後別々に、大なる教訓を捉げたるものなればなり。約言すれば社會の智識は、書肆の戸棚也、戸棚の隅也、隅の塵也、塵の山也。

○古の歌人の月花を脱し得ざるが如く、今の新體詩人は、唯一つの星を脱し得ずとは、某批評家の言なりと聞く。げに歌人、詩人といふは可笑しきものかな。蝶二つ飛ぶを見れば、必ず女夫なりと思へり。時を選んで夕鳥、嘗て曲亭馬琴に告げて曰く、おれは用途に行くのだ。

○沈酔せり、醒さざる可からず。老衰せり、葬らざる可からずとは、今の批評家の紋切形也。天才結構、大結構、今の批評家の名に應ずる天才あらば、われら一生の思出、疾く拜顔の榮を得んことを望む。もし其言の如く、悲壯なる其言の如く、われらをさへ交へて僅に五七人を葬るを得ずば、今の批評家は墓地の穴掘りにども及かざる者也。悲壯は原稿の埋草也。

○現時の政黨は、一の商賣なりといふにあらざる

や。さらば其宣言書の、彼此共に異なるなきを囁ふを要せじ、各々様御機嫌克くの引札に過ぎざればなり。利をかゝけて勸誘に力むるを嗤ふを要せじ、何日間賣出しの景物に過ぎざればなり。

○無鑑札なる營業者を、俗にモグリと謂ふ。今の政黨者流は、皆このモグリなり。鑑札無くして賣買に従事するものなればなり。

○正義を唱ふるの士は、正義を行ふの士なりと思へ。公德の缺乏を慨する者にして、一己私徳の上にだに缺乏せる者あるを思ふことなかれ。要は唯信するに在り。信するはめでたきものなり。天下太平の策、こゝに於てか定まる。

○豆蔵氏が言に曰く、見ると聞くとは大なる相違と。然り見ると聞くと、大いに相違することなくば、今日ありてはゆゝしき大事也。國家の大事也。

○一切の虚偽を排するは、一切の眞實を排するなり。虚偽と眞實との關係は、鱷に對する酢味噌の如し。まことそらごとと取交せるにあらざれば、遂にお話はなり難し。

○諛は藥か、諛は毒か、相待つて世に悠久に健かなるを得るなり。何事も造化の配劑に歸したる古人が言も、蓋しこの意に出でざるべし。

○諛も誠も物の名のみ。時と處とによりて、おのづから運用の別あるのみ。浪速の蘆は伊勢の濱荻たるの類のみ。

○欺くは智也、欺かるゝは徳也、されども人は、欺くほどの智ある者に非ず、欺かるゝだけの徳ある者なり。

○秘する者は秘し、秘せざる者は秘せず、ことわると否とに關せざるべし。秘密を迫るは、公開を迫るなり。陰蔽は流布なり。人より秘密を語げられたる時は、われらが最も戒心すべき時なり。

○人の世に最大不必要なるもの、唯一つあり、名けて識者といふ。

○學問は宜しく質屋の庫の如くなる可からず、洋燈屋の店の如くなる可し。深く内に蓄ふるを要せず、廣く外に擲ぐべし、ぶら下ぐべし、さらけ出すべし。其庫の窺知し難きも、其店の透見し易きも、近寄る可からざるは一なり、危険は一なり。

○換言すれば、古の學者は、不透明體なり、今のは透明體なり。更に其説く所に由りて判すれば、古のは固體、今のは氣體なり。

○鏡を看よといふは、反省を促すの語也。されどもことに反省し得るもの、幾人ぞ。人は鏡の

前に、自ら恃み、自ら負ふことありとも、遂に反省することなかるべし。鏡は悟りの具にあらず、迷ひの具なり。一たび見て悟らんも、二たび見、三たび見るに及びて、少しづつ、迷はされ行くなり。

○何人が鏡を把りて、魔ならざる者ある。魔を照すにあらず、造る也。即ち鏡は、瞥見す可きものなり、熟視す可きものにあらず。

○老いたる人の肖像といふを見るに、何處にか鬼相を止めざるは莫し。人の面は、など斯く恐ろしきや、老はなど斯くあさましきや。

○過去、現在、未來を分けてもいはず、總ての然は、總ての人を惡業に誘かんがために、點ぜらるゝなり。罪の手引なり。

○燈の数は上野公園に少く、淺草公園に多し。着手以前に用あれども、以後に用なし。

○燈影明るき處、罪業あり。暗き處、悔悟あり。燈と鏡と枕とは、歴史家の遺棄す可からざるものなり。

○驕奢の風、都鄙に瀰漫すといふは眞歟、恐らくは是れ、驕奢の誤解なるべし。わが釋ね得たる所を以てすれば、昔時驕奢と稱せられたる

は、多く他を潤せり。今時の單に、自己を潤すに過ぎず。

○故に一人倒るれば、昔は數人共に倒れたり。今は一人の倒るゝに止まる、擧倒るゝに止まる。

○之を一家内に見るも、夫が驕奢は、妻に係はる事なし。妻が驕奢は、夫に係はる事なし。おのれが驕奢のためには、夫が飯のつめたきも、妻が衣のいやしきも、相互ひに顧慮する事なし。

○あゝそれ驕奢なるかな、豪侈なるかな。われは人の數十金數百金を投ぜるを目撃す。併せて指環は其人の手に、時計は其人の胸に存在せしめを日撃す。依然財産たり。

○聚めんと欲せば、先づ散せよといふは、轉んでも只は起きぬの同義なりと信ず。

○公益を計らんものは、私益をも計らざる可からず。生命、榮譽、財産を擲つと稱する際に、猶萬一といふ語を、成功の上に置かず、失敗の上に置くなり。

○誰にもあれ、一事一業を起さんとするを見る時は、若に之れに親めよ、寧ろ狎れよ。其の濁り成らんとするを見る時は、竊に之れを羨めよ、寧嫉めよ。而して不幸、半途に敗るゝに

遣はゞ其時は唯其人の自業自得なりと言へよ。是れ今日の秘傳也。

○羅綾を穿ち、錦繡を纏ふ。之を今朝に見て駭くが如きは、都人士の事に非ず。昨夜に聞かばよその蔽に、拘禁せられ居たるは言ふ迄も無し。風扇かに花を吹きて、春面白き小袖暮も、實は番頭を泣かせたるものなり。

○拘禁といふに若語弊あらば、改めて保管といふべし。吾家なるは郷重にし、質屋なるは蔽重にす。俱に與に、字は重んずるなり。

○體裁は夏向ならず、冬向なり。入りに悄然たる者は、出でて傲然たる者なり。質屋が店の格子の如く、人の心に急遽なる變化を與ふるはあらじ。

○歲毎の春の花也、秋の月也。特り今年に限りて、物飲み、物食ふを要せんや。故に風通、一樂の車をつらねて馳行くは、山樵水亭の何れにもあらず、鹹き鮭一切れ、晚餐の膳の上にお遷りを待てばなり。今の驕奢といふは、大抵此の如きもののみ、所謂路人に糶かすに過ぎざるもののみ、人前のみ。

○名は必ずしも紳士録、職員録に上れるをもて、選げたりと思惟する勿れ。あまりにそれは輕はずみ也。早手廻し也、無餘論けちなる料簡也。

遣はゞ其時は唯其人の自業自得なりと言へよ。是れ今日の秘傳也。

高利貸といふ者の臺帳に記入せられざれば、世間は決して名士と呼ぶことなし。

○名士の高利貸に於けるは、狐の稲荷に於けるが如し。司命者也。高利貸なかりせば、世は斯の如く靜穩なる能はず、隆盛なる能はず、箸の上げ下げにまで萬歳を唱ふる能はず。

○洋の東西、時の古今に論なく、国力充たす、國威揚らずなどいふことあるは、其處に高利貸を缺くがためなり。利のみならず、總てに高き營業なることは、文明國に多く植息すといはんよりは、跋扈するを見て知るべし。

○縦横計不就、慷慨志猶存。高利を借れるなり。人生感意氣、功名誰復論。情婦を持てるなり。

○待てと一人、わが言を遮りて曰く、驕奢者狹斜也、義者妓也、吾相通するにあらずやと。げにもクンシは漢音也、キミコは和訓也。

○さらば備等、酔へや眠れや夢よや。覺めざれば呼ばず、さめて初めて天を呼ぶは、人各々に定まれる義務にてもあるべし。

○衆皆酔ひ、吾獨醒むといふは、九尺二間の事なり。裏長家の事なり。運命を總後架と、掃溜とに隣りて有する不理窟なり。今と雖も、遂に水に起かざるを得ず。(明治三十二年六月)